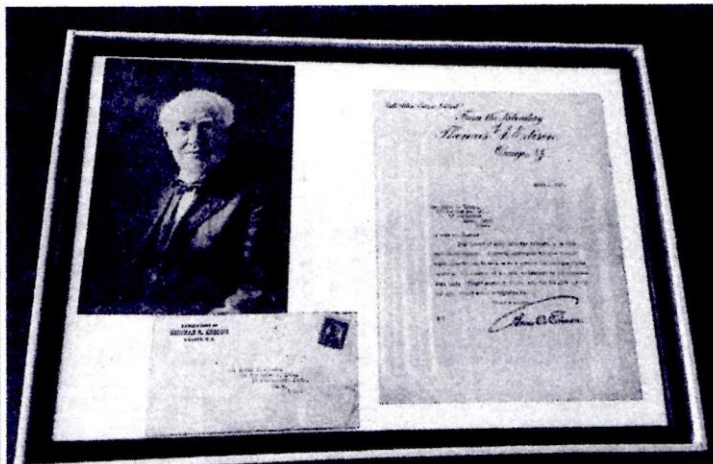


発明王エジソン 晩年の手紙

「優しい気持ちに感謝」

発明王エジソンが83歳の時に日本人に送った手紙がこのほど、上智大学に寄贈された。のちにオーム社の社長を務めた田中剛三郎氏宛てで、田中氏が白熱電球の発明50周年を祝い、エジソンに贈った花かごへのお礼の言葉が記されている。84歳で亡くなったエジソンが日本人に送った最後の手紙ともいわれる貴重な史料だ。この手紙が送られることになったそもその発端には、当時の日本電気協会も少しばかり関わっている。



寄贈された額には手紙と封筒、エジソンの写真が収められている

オーム社元社長 田中氏宛て

田中氏がエジソンにフレゼントをしたのは、その前年、1902年10月30日(昭和5)年3月、発明から50年に当たる。この

れを記念して記念論文を募集したのが日本電気協会だった。募集テーマは「電燈照明50年の発達と今後のすう勢」。田中氏はこれに応募し、入選した。

賞金は当時の大卒初任給並みの75円だったという。

田中氏は賞金を使い、エジソンにフレゼントを贈ることを思いついた。エジソンが白熱電球のフィラメントに京都の竹を用いたことになみ、京都の竹を用いた竹細工の花かごを購入。手紙を添えて米国のエジソン研究所に送った。

翌月にはエジソンからの返信が。手紙にはタイプライターで「フレゼントとして立派な花かごを贈ることを思いつかせたあなたの優しい気持ちに深く感謝します」と記され、筆記体のサインが添えられている。手紙は田中氏が亡くなった

ご返信 花か返 竹製呈 家族が保管、上智大へ寄贈

た後も家族が大切に保管していたが、最近になって田中氏の娘である田中祥子さんがしかるべき所への寄贈を考え始めた。

つてをたどり、寄贈先を探した結果、名前が挙がったのが上智大。祥子さんはキリスト教系の大学を卒業していたため、同じキリスト教系の上智大に決まったことを大変喜んでいたという。10月には祥子さんと早下隆士・上智大学長ら関係者が出席し、贈呈式も行われた。

エジソンと日本の縁を感じさせるこの貴重な手紙は現在、上智大中央図書館貴重本保管庫に保管されている。今後、展示公開も検討しているという。学生たちが希代の発明王を少しでも身近に感じ、夢を膨らませるきっかけとなることが期待される。

焦点

舞台は1830年頃のバリ。

クリスマスイブの夜、カルチェラタンの屋根裏で詩人のロドルフォと裁縫師のミミは運命の恋に落ちる…。プッチーニのオペラ『フ・ボ

エーム』は恋のはかなさや魔力、美しいアリアが印象深いイタリアオペラの代表格である▼へん々が亡くなり、国々が変わっても、ラ・ボエームの歌曲は永遠に不滅でしょう。プッチーニに宛てて、こう

書き送ったのはあのエジソンである。親交も深く、別荘には発明王が贈った蓄音機も残されている▼筆まめだったのだから、エジソンは多くの手紙を残している。

有名なのは銀行家モルガンへの手紙であろう。電力系統の直流、交流を争ったライバルのテスラへの融資停止を訴え、人間らしい一面が覗く。自身が成し得なかった真珠の養殖に成功した御木本幸吉への手紙では謙虚に偉業を讃えた▼この手紙も人柄を知る貴重な史料であろう。

理工学出版の老舗オーム社の社長、会長を務めた故田中剛三郎氏が21歳の時、エジソンから手紙を貰っていた事が本日付第2面に紹介されている。娘の田中祥子さんが保管してきたが最近上智大学に寄贈された▼きっかけは日本電気協会が1929年に実施した電燈発明50年記念論文である。入選した田中氏は賞金で30年3月、電球実用化のカギとなった京都の竹を編んだ花籠をエジソンに贈ったところ、翌月返信が届いた。当時エジソンは

83歳。遠く離れた日本の無名の若者に素直に感謝を綴っており、興味深い▼田中氏はオーム社のトップなど要職を歴任し、出版文化国際交流会の設立にも貢献した。時には発明王から貰った手紙が支えになった事もある。手紙は同大学中央図書館貴重本書庫に保管されている。